

史遊会通信

No.245号
平成27年
9月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

七月講演要旨

白山信仰の謎とエミシの神

前田 速夫

私は長年新潮社で文芸の編集に携わって
きましたが、在野の研究者菊池山哉の著作と
出会ったことが直接のきっかけとなって、民
俗の研究に横滑りしました。もう定年も近く
なつてからのことですから、晩学もいとこ
ろです。今日は主に、みちのくの白山信仰の
古層とエミシの神とのかかわりについて、仮

九月から会場が銀座ルノアール三
階六号の貸会議室に変わります。
東京駅八重洲北口・外堀通り横断
徒歩三分、S M B C日興證券並び

説的な問題提起を含めてお話ししてみたいと
思いますが、その前に白山信仰とは何か、そ
の興味深い謎とはどのようなことかについて、
簡単にご紹介しておきます。

石川・福井・岐阜三県にまたがる北陸の名
山、白山のことは御存じでしょう。標高は二
七〇三メートル。一年の半分は真っ白な雪を
被った優美な姿をした霊山です。神仏習合の
最初期、養老元年(七一九)にこの白山に初登
頂した泰澄という僧侶が祈っていると、緑ヶ
池の中から、はじめはイザナミ、のちにキク
リヒメの名で知られる女神が出現します。つ
まり、これが泰澄による開山というわけで、

天長九年(八三二)に加賀・越前・美濃に三馬
場(登拝基地)が築かれ、天安二年(八五八)
比叡山を守護する七社の一つとして祀られる
と共に、隆盛に向います。熊野信仰や出羽三
山信仰と同じ、山岳修験の宗教です。ただし、
これは表向きの公式的な歴史で、私が関心の
あるのは、非公式に語られている伝承の方で
す。箇条書きにすると、こうです。

1 白山信仰の開祖とされる泰澄は、同時
代の行基や道昭や玄昉と交流があり、勅によ
り元正天皇のもとに参内、不予を平癒した功
で、禅師の位を授けられたと伝えられるが、
『続日本紀』をはじめとする正史に、その名
は見当たらず、実在が確かめられていない。
泰澄とは、何者か？

2 主神のキクリヒメは、『日本書紀』神代
巻第五段一書の十にのみ登場し、ただ一行「是
の時に、菊理媛亦た白す事有」としか書かれ
ていない。この謎の女神を主神に据えたわけ
は？

3 北陸の一地方神でありながら、中部、
東北、関東、近畿、西日本、四国、九州と全
国的な信仰圏を有する。かくまで浸透した理
由は？

4 イタコが遊ばせるオシラ神や、クグツ
の徒が祀る百(白)神、百(白)太夫は白山神と

同類。そのほか、白日神、白髭神、天白神や、白山信仰の宣布者として知られる白(八百)比丘尼もそうで、これら白い神々には、白あるいはシラの神祕がついてまわり、その実態はいま一つ定かでない。白山神とはいかなる関係にあるのか？

5 白山神社を鎮守とするのは、東国の被差別部落に限らない。少数ながら西国の被差別部落にも存在する。その理由は？

6 白山がハクサンと音読みされるのは江戸中期以降で、それ以前はシラヤマ。白山信仰の前身であるウル(原)シラヤマ信仰の本源は？

すなわち、これらの謎を解明しようとしたのが、拙著『白の民俗学へ』『白山信仰の謎と被差別部落』(河出書房新社)『海を渡った白山信仰』(現代書館)等で、私なりに解明できたものもあれば、いよいよ謎の深まったものもあるといった具合です。ただ、いずれにしても、白山の女神キクリヒメは、黄泉の国で死のケガレに触れたイザナギに、ミソギをすればこの世に再生、ヨミガエルことができることを教えた神で、本地の十一面観音は慈悲深い反面、災いを撃退する怖ろしいまでの呪力を秘めた仏であること、ウル白山信仰はユラシアがルートで、中国と朝鮮の国境に聳

える白頭山の麓にいた濊族(ツングース系が朝鮮半島を南下して秦氏と接触し、彼等のリレーでわが国にもたらされたことが重要です。

そこで、本日の主題であるみちのくの白山信仰についてですが、ご承知のように、大和朝廷が進出する以前から同地に住んでいたのは、エミシと呼ばれた人たちです。奥州藤原氏はその末裔を名乗り、都である平泉の地名が越前の平泉寺白山神社に由来することからも知られるように、代々熱心な白山信仰の信者でした。朝廷側と戦って降伏し、捕虜にされた人びとは俘囚と呼ばれましたが、彼らも白山神を祀っています。

もともと白山信仰がこの地にもたらされたのは、天台宗の高僧慈覚大師円仁にあやかった布教の結果か、征夷大將軍坂上田村麻呂によつて亡ぼされ鬼とされたエミシの霊を慰めるためという、中央の側に都合のよい理由によるものでした。けれども、そのいわば敵方の宗教を有難く受容したばかりか、むしろ積極的に信仰するに至ったのは、なぜだったのでしょうか。

私はそのわけを、本来エミシが信仰していた在地の神——オシラサマやザシキワラシ、あるいはリクコタンやオロヘシ、イタテといった、和語では意味不明の「延喜式神明帳」に載る神々です——は、どれもプレ(前)白山

神とでもいうべき、大陸のウル白山神とも重なる、北方から伝来した神々だったからではないかと見ています。つまり、わが国の白山信仰は、朝鮮半島を経由したものと、北方アジア、シベリアを経由したものと二種類あるというのが、私の仮説です。

ウノ・ハルヴァは『シャーマニズム アルタイ系諸民族の世界像』の中で、「アルタイ地方では、犠牲に供した馬の中身を抜いた皮を、生きた馬を思わせるような形にして、斜めに立てた柱に刺し通しておく」と述べました。これは、スサノオが天の斑駒を逆剥ぎにして、その皮を放りこみ、アマテラスが洞窟に籠る原因となった行為を思わせると共に、柳田国男が『遠野物語』に記したオシラサマの由来譚とも重なります。

古代みちのくで盛んだった産鉄や騎馬の風習は、弥生時代に西から流入したとの見方が一般的ですが、私はそれよりずっと以前の、北、つまり蒙古やシベリアからの移入をなぜ考えないのか不思議でなりません。当然、宗教上の影響もあつたはずなのです。

オシラサマの研究は、歴大な蓄積が民俗学にあります。けれども、それは形態や分布、祀り方といった直接取材できる範囲に留まっています、その発生については謎のまま放置されてきました。しかし、近年の目覚ましい研

究の進展の結果、エミシからアイヌが枝分かれしたのはたかだか十二世紀で、弥生文化が流入する以前のみちのくは、縄文以来の伝統を有するエミシの支配下にあつて、日本海航路を通じて北方世界との交流、交易が、思っていた以上に活発だったことが立証されつつあります。

オシラサマの風習もそうですが、みちのくの庶民層一般に白山信仰が浸透したのは、修験や白比丘尼の働きが大きかったように思います。白比丘尼は一名八百比丘尼と呼ばれ、人魚の肉を食べたので八百歳の長寿を得たという若狭出身の廻国の遊行者です。柳田國男は『雪国の春』で、温暖の地の椿がみちのくの北辺に群生しているのはなぜかと問いかけましたが、あれは椿の枝を持って諸国を遍歴した白比丘尼が信仰の証しに植えたものだったのです。つまり、白比丘尼とは白山信仰にとつて、熊野信仰における熊野比丘尼のよくな存在だったわけです。

円空仏で有名な円空も、私は白山修験だったと思っていますが、彼がみちのくからさらに蝦夷地に渡ってアイヌの人々の住む集落で仏像を彫ったのは、自分も同じ被差別の民だという自覚があったからではなかったでしょうか。その円空の足跡をそっくり辿って、追体験しているようなのが、江戸後期の遊歴文

人菅江真澄で、その謎めいた生涯は、隠れキリシタンならぬ隠れ白山信徒だったこととかわりがあると、私は推測しています。

話を戻して、敵方の白山信仰を受け入れたエミシの心の内を考えてみます。白山神を祀る東北の地の観音堂には、よく北方の守りとしての毘沙門天(多聞天)像が安置されていますが、その足許を見ると、大抵は鬼が踏みつけにされていて、これはもちろんエミシを表徴しているわけです。ところが、兜跋型の毘沙門天像は、逆に地天女が支えています。前者は立花毘沙門堂、後者は藤崎や成島の毘沙門堂が、その例です。つまり、ここに逆転が生じているのです。

そういえば、縄文末期の亀ヶ岡遮光器土偶の表情も、目を閉じているのかと思えば、トンボ眼鏡のようなそれが表わしているごとくに目をらんらんと見開いているようでもあって、はなはだ両義的です。現在でいうなら、ネブタ祭りに興じる市民の熱狂も、坂上田村麻呂を顕彰する一方で、それを流して祀り棄ててもいるのですから、やはり両義的です。

こうした傾向は、みちのくを代表する文学者(太宰治)や芸術家(棟方志功)の作品にも顕著です。一番ピツタリくるのは、宮澤賢治の詩「原体剣舞連」でしょうか。「むかし達

谷の悪路王まつくらくらの二里の洞 わたるは夢と黒夜神 首は刻まれ漬けられ アンドロメダもかがりにゆすれ」——荒ぶる神としての鬼の異形性、両義性が本能的につかみとられ、それを打ち返して風や光と対峙させるなかで、真に靈的な存在へと昇華させている、これこそは北方の神々の影響を受けたエミシの神の真髓であり、そこには縄文の神やプレ白山の神への信仰もこだましているようです。

(外部招請講師)

講師プロフィール

民俗研究者。元「新潮」編集長。著書に『異界歷程』(晶文社)『余多歩き 菊池山哉の人と学問』(同、読売文学賞)『白の民俗学へ』『白山信仰の謎と被差別部落』(河出書房新社)『古典遊歴』(平凡社)『辺土歷程』(アーツアンドクラフツ)『海を渡った白山信仰』(現代書館)、共著に『渡来の原郷』(同) 編著に『日本原住民と被差別部落』(河出書房新社)『鳥居龍蔵 日本人の起源を探る旅』(アーツアンドクラフツ)がある。えみし学会会員。

自由執筆

江戸末期の数学者 高久守静

佐藤 健一

日本では明治五年（一八七二）八月に学制が公布され、学校で教える算数・数学は洋算即ち西洋流の数学（現代の数学）と定まった。

しかし、翌年から実施されるのに、使用する教科書はまだなかったのである。発布される三カ月前には、和算家高久守静撰の「数学書」が出来上がっていたし、これを全国で使うことになっていたからである。

明治五年正月、高久は文部省の小学係で、後に師範学校の初代校長になった諸葛信澄に呼ばれた。

諸葛「今後、小学校で使用する数学書を選んでくれたまえ。その様式は西洋に見習って加減乗除からはじまり按分比例ぐらいいままでにしてほしい」

と教科書の作成を依頼された。高久は引き受けたので、文部省より委嘱された。

高久は昼夜その編集に没頭し、明治五年五月「数学書」全十巻を完成し、ただちに印刷され全国の各学校に配布された。これにより日本は高久の作った和算の教科書「数学書」

により教育することになった。七月に高久は文部省から御褒金として十円を受けている。

ところが、八月前述の通り学制が発布された。高久の「数学書」は教科書として認められなかったのである。この間文部省内で何があったのであろうか。明治五年に開校した師範学校には若干二十八歳のアメリカ人教師のスコットが教官になった。文部省はこのスコットに指導を仰いでいたようだ。当然の事であるが計算道具である「そろばん」も排除された。

文部省は洋算の採用に踏み切ったが、幸いなことに沼津兵学校で刊行している塚本明毅の『筆算訓蒙』が明治二年に出ていた。この『筆算訓蒙』を教科書として指示した。（小学教則による）

高久の家に文部省の小学係官員である吉川高友が明治四年十一月に訪ねてきた。

吉川「今度小学校を改革しようと思う。数学の教師が不足とているので奉職してほしい。給料は八円だが引きうけてほしい」

高久「その数学は和算なのか、洋算なのか」
吉川「和算である」

高久「和算なら僕の望むところであるから喜んで奉職し、大いに勉強したい。給料の多寡は問題ではない」

高久は明治四年十一月二十五日文部省に召喚され第一小学校の辞令を受け十二月二日から勤務した。高久は西洋数学を知らなかったから『筆算訓蒙』を読みながら西洋数学の力をつけ、明治六年から始まった小学校で授業を始めた。高久に限らず小学校で数学を教える人は和算を身に付けた人であったから、訓導という立場の人が学校を巡回して不都合な部分を指摘することになっていた。高久はたびたび訓導の巡視にあった。数学訓導の松浦操が高久の授業を見て、自分たちの式の立て方と異なることに気付いた。

松浦「たとえ答が合っても式が違うのは駄目だ」そのようなことが続き、他の訓導たちも何かにつけて注意した。

明治九年十二月には、高久に対して学力を試験すると言い出した。高久自身下位とはいえ訓導である。これ以上この任務を続けることに嫌気がさし、小学校の教師を辞めることにした。高久はかなり長文の辞表を東京府知事楠本正隆に提出した。高久はその後数学の研究を続けたが教師にはならなかった。

自由執筆

無人島生活二十一年

—遠州新居の漂流者—

太田 精一

昨年静岡県湖西町新居町に住む私の高等学校時代の友人小池明成君から「無人島漂流者の話」と題する冊子を戴いた。

新居町は、東海道の宿場町で江戸時代、箱根と並ぶ重要な関所があった。その上、湊があり、今切れの渡しのある町でもあった。

今切れは、明応七年（一四九八）の大地震による津波で浜名湖が決壊したことにより生じたものである。それ以来淡水湖の浜名湖は遠州灘と繋がり、海水の入り込む湖となった。

江戸時代新居は、上方と江戸では違った表記がなされている。新居は上方の表記であり、江戸では荒井と書く。何故そうなったのか定かではないが、新居は正倉院文書にも出てくる古くからの地名で、地元の人たちは江戸時代も新居の文字を使っている。

遠州灘は、古来航海の一大難所であった。にもかかわらず、沿岸に良港がないため、新居は廻船の寄港地及び遠州西部の城米輸送基地として重要な湊であった。宝暦年間（一七

五一〜六三）に新居では、二〇〇〜六〇〇石積みの廻船が七艘あったと記録されている。

「無人島漂流者の話」は、太平洋沿岸大阪・江戸間の物資輸送を行っている新居湊の廻船問屋筒山五兵衛船が享保四年正月、十二人の水主を乗せて、無人島（現在の鳥島）に漂着した物語である。

物語を読み進むうちに私は、筒山五兵衛船の水主たち、とりわけ二十一年間無人島で生き残った三人の島内での生活と帰国後の生き方に興味を持った。

そこで、この話を題材に短編小説を書こうと思い立ち、同人誌「まんじ」に寄稿することにした。彼らの生存をかけた生活の知恵と創意工夫を伝え、生きるとはどのようなことか読者に問いかけて見たかったからである。小説としては、成功したかどうか分からないが、世間と隔絶した無人島暮らし、望郷、救出への一縷の望み、仲間同士の連帯感、帰国後の生活など、記録された文書をもとに、独断と偏見を交え物語を構成してみた。

漂着のあらましは次の通りである。

筒山五兵衛船が今切れ湊を出帆したのは、享保三年（一七一八）十一月であった。翌年の春まで江戸、伊豆、三河、駿河と城米や木

材などの輸送に当たっていたが、江戸で増水主（補充乗組員）二人を乗せ、同年秋、荒浜（宮城県）へ向かい幕府へ納入する御城米を積み込み、房州銚子まで運んだ。銚子で積荷を下した船は、再度北上し、宮古で材木を積み、便乗者一名を乗せ、十二人で、宮古から気仙沼を経て、石巻小竹浦に入港した。

享保四年（一七一九）十一月二十六日同港を江戸に向かい出帆。三十日に九十九里浜に差しかかったところで暴風に遭った。帆柱を捨て転覆は免れたものの漂流し、享保五年（一七二〇）一月、鳥島に漂着、伝馬船に鍋釜や手道具を移して上陸した。だが、折悪しくその後時化が来て本船も伝馬船も流されてしまい、島から脱出の機会を失った。

漂流後三年間は全員生きていたが、その後十年の内に九人が死んだ。残りの三人がその後も十年以上生き続け、漂着二十一年後に房総沖で遭難した江戸堀江町の宮本善八船が島に漂着した。その伝馬船でやっと同島を脱出することが出来たのである。

三人の漂流帰還者については、当時大きな話題となり、時の將軍吉宗は、江戸城吹上御庭に三人を召出して、島の様子や生き抜いための方策などについて吟味している。その内容が「無人島帰国者口書控」と「元文四年（一

七四〇) 末年無人島漂着之水主三人吹上御庭江召出シ相尋候答」として記録に残っている。

鳥島には、その後も漂着者が相次いでいる。泉州箱作村鍋谷五郎兵衛の廻船の水主二名が宝暦三年(一七五三)から九年(一七五九)まで六年間同島で暮らしている。さらに天明五年(一七八五)一月、土佐の長平の五人乗りの廻船が、室戸沖で遭難、十四日間太平洋を漂流して鳥島に漂着。一年後の天明六年に四人が死亡した。生き延びた一人は、天明八年二月新規の漂流者大阪船の十一人と合流するまでたった一人で一年半暮らしている。その後、寛政二年(一七九〇)鹿児島と宮崎の県境日向志布志浦住吉丸の水主六人が漂着、総勢十八人となってから力を合わせ、同島から脱出するための船を作り始め、寛政九年(一七九七)六月完成、島を脱出。青ヶ島、八丈島に立ち寄り、同年九月江戸に帰還している。

難破により船を失った筒山五兵衛家は、その後、新居関所西に旅籠「萬屋」を経営、後に芸妓置屋になったと伝えられている。

新居の水主三人は、生還後幕府から扶持米として一人三人扶持を支給された。が、目的のない暮らしに生きる意味を失い、島で米作

り励んだことを思い起こし、土地を借り三人で力を合わせ、米作りを故郷で再開した。後にそれが生き甲斐となってそれぞれに天寿を全うしている。

自由執筆

天 智 玉

森下 征二

昨年六月の「史遊会通信」に、天智天皇の諡号について書いたことがある。歴代天皇の漢風諡号の中で、「天」が付くのは天智・天武の二帝だけであること、「智」が付くのは天智天皇の外にはいないこと、「智」は「知」に通じ、治めると言う意味であること、そして天智の和風諡号である「天命開別天皇」が、天命を受けて国を開いた天皇、と読めることから、天智天皇もハツクニシラススメラミコト、即ち日本国初代の天皇の一人ではないかという内容であった。

その後、これを私の所属する同人誌に転載したところ、あるご婦人から次のようなお便りを頂いた。

「ご見解を注意深く拝見しました。すでにご存知かと思いますが、井沢元彦氏は『逆説の

日本史2』の中で、森鷗外の『帝諡考』を引き、天智とは殷の紂王が最後まで身に付けていた『天智玉』のことであり、周の武王はそれを戦利品にした…と書いています。面白い考えだと思いますが、如何ですか？」

早速「逆説の日本史2」をひもといてみると、その「天智天皇編」に、森鷗外が引いた「逸周書」を意識されていて、次のような記載があった。

「周書」という歴史書には次のようにある。周の十三年、武王は君主となって天下を平定した。一方、(それまで天下の主だった)商(殷)の紂王は、甲子の日の夕刻、天智玉を身に飾り焼身自殺した。その時、四千の玉(宝石)が焼けたが、天智玉の五つが焼け残ったので、武王はそれを戦利品とした。

「天智」と言うのは殷の紂王が最後まで身に付けていた宝石の名前なのである。これが何を意味しているか、もうわかりだろう。つまり、「天智天皇」は「殷の紂王」だと言っているのだ。…。紂というのは、日本の国語辞典にすら載っている代表的な悪王なのである。たとえば『広辞苑』には「殷王朝の最後の王。名は辛。受とも。紂は諡号(しこう)。

妲己(だっき)を寵愛し、酒池肉林に溺れる(以下略)」とある。

更に読み進めて行くと、同じく鷗外の『帝諡考』を引き、天武天皇の諡号について、以下のように記す。

天武紀 漢風諡号

周書、大明武、畏敵大武曰維四方畏威乃寧、

「天」作「武」修戎兵以助義正違、

(文中、鍵括弧は私が付けた) ……。

これはいきなり周の武王の言葉で始まっている。例によって意訳すると、次のようになる。「大明武」の章に言う。畏敵大武(武王のこと)が言うには「ここに四方の国は威を恐れ安らかになった」。天は武王をたてて兵をととのえ正義を助け、悪しき者を正した。

鷗外が、そしてはるか古代の「諡号」の撰者が、何を考えていたかもはや明白だろう。すなわち、「天武」とは「周の武王」である、と言うことだ。

井沢氏は、他に考えようがないと、断言されるのである。更にこの本を読み進めて、彼の説を要約すると次のようになる。

天智は殷の紂王であり、天武は周の武王である。従って、天武は天智を殺した。天智天皇は暗殺されたのであり、その犯人は天武なのだ……と。

しかし、本当にそうなのだろうか？ 疑問に思った私は、「逸周書」について調べてみることにした。

古来、この書物は脱誤が多く雑然とし、その出自にも異説があつて、扱いにくい資料だと言われてきたが、近年、中国の学者の研究が進み、再評価されていると言うことだ。その代表的な学者である黄懐信の「逸周書校補注釈」を見ると、天智玉の記載についてはともかく、「大明武(井沢氏は天武天皇の諡号の根拠とされている)」の解釈には、どうやら誤解があるようである。

周書、大明武、畏敵大武曰維四方畏威乃寧、
天作武修戎兵以助義正違、……。

これを、黄懐信の現代語訳を頼りに、私なりに翻訳すると次のようになる。

敵かで神聖な戦だけが、その威厳をおそれさせ、四方を安寧にすることが出来る。上天

は戦を惹き起こし、兵と兵器を作らせて、正義を助け、不義を正すために用いる……。

天作武の「武」は武王を指してはいないのだ。「武」は「武事」であり、「戦」であるということだ。

それだけではない。我が国での「逸周書」の研究者・高野義弘氏によれば、そもそも「逸周書」の「大明武」の章は、武王の言った言葉を記載している章ではない。武王の父の、文王の言葉を記載して章なのである。井沢氏の説は、残念ながら、誤解と言うほかなさそうである。天武の諡号の根拠が崩れれば、天智の諡号の根拠も崩れざるを得ない。天智玉の説はそれなりに面白いが、成り立たないのではなからうか？

それでは私はどうか？ やはり、昨年この誌面に記載したように、天智と言う称号は、ハツクニシラススメラミコトを示すものだと考える。その時以来、私は自説を若干補強した。今年の十月、史遊会の発表の機会を与えられたこともあり、そこで拙い考え方を述べてさせて頂きたいと思っている。

そんな訳で、この小文を持って、次回の発表要旨に代えさせて頂きたい。

五月講演要旨

蘇我氏倉家の一族

隆 恵

蘇我氏と言えば、ほとんどの人は馬子や蝦夷や入鹿を考えるとと思う。この人物たちを蘇我氏宗家と言う。ご承知のように大王家を凌ぐ隆盛を誇っていたために、中大兄皇子により粛清され、宗家は断絶する。この事件を乙巳の変と言うが、この政変に加担したのが蝦夷の甥に当たる同族の倉山田石川麻呂である。この石川麻呂の祖父が馬子で、馬子の息子即ち蝦夷の兄弟に彼の父の倉麻呂がいる。この父親の倉麻呂も蝦夷の意向に逆らうなど、宗家に逆らう事が馬子亡きあと続いた。宗家と別行動をとる理由は、蝦夷よりも財力で勝る全く別個の氏族だったからである。この石川麻呂は数年後、無実の謀反の嫌疑で中大兄皇子に一族が皆殺しにされるが、彼の姫たちが中大兄皇子の妃となっていたので、後の持統天皇を子孫に持つ事となる。この倉家の一族の色んな人たちをご紹介します。

史遊会の27年行事計画 会場と日程の変更 敬称略

講演		自由執筆				
月日	担当	No	締切日	担当		
9月23日	隆 恵	9月 245号	8月末	太田	森下	佐藤
10月17日	森下征二	10月 246号	9月末	村上	漆原	諸橋
11月21日	(討論会)	11月 247号	10月末	平山	隆	藤田
12月9日	(忘年会)	12月 248号	11月末	(今年感動した本)		
1月16日	柴田弘武	1月 249号	12月末	三戸岡	中込	安田
2月20日	千坂精一	2月 250号	1月末	千坂	新井	柴田
3月19日	瀧澤 中	3月 251号	2月末	滝澤	宇野	高橋
4月16日	高橋正彦	4月 252号	3月末	太田	森下	佐藤
5月21日	佐藤健一	5月 253号	4月末	村上	漆原	諸橋
6月18日	諸橋 奏	6月 254号	5月末	平山	隆	藤田

次表のようにお知らせいたします。

行事計画の変更について

9月23日(水、祭日)から、会場を銀座ルノアール「貸会議室プラザ八重洲北口三階6号室」移転し、開催時刻を15時から2時間といたします。

なお10月以降は会場と時刻はそのままですが、開催日が第3土曜日となります。

例会のお知らせ

◎ 九月例会

日時 九月二十三日(水)午後三時～五時

会場 銀座ルノアール貸会議室三階六号

講演 隆 恵 氏

テーマ 蘇我氏倉家の一族

十月号自由執筆 村上邦治、漆原直子、

諸橋 奏の諸氏 締切九月末

◎ 十月例会

日時 十月十七日(土)午後三時～五時

会場 銀座ルノアール貸会議室三階六号

講演 森下 征二 氏

テーマ 天智玉 今号に紹介記事あり

十一月号自由執筆 平山善之、隆 恵、

藤田隆彦の諸氏 締切十月末

銀座ルノアール貸会議室三階六号室

電話 〇三―三五七〇―七八八九

中央区八重洲一―七―四

東京駅八重洲北口から外堀通りを横断

八重洲北口通りのSMB C日興証券の並

び。 徒歩三分